おまえざきの人 きらり輝く人

青年海外協力隊として世界へ踏み出す 植田 絢子さん

PROFILE

うえた　あやこ（白羽区・27）

大学時代に参加した海外研修が、海外に興味を持つきっかけとなった。海外へ出るための手段の一つに青年海外協力隊を選んだ。

ケニアへ向けて出発

独立行政法人国際協力機構（JICA）の平成27年度青年海外協力隊の第4次隊として、3月末からケニアへ2年間派遣された女性がいる。植田絢子さんだ。御前崎市から同隊として派遣されるのは12年ぶりとなる。

JICAは、日本の政府開発援助を実施する機関で、開発途上国の要請に基づき、いろいろな分野で技術や知識、経験などを持った人材を派遣し、支援している。

今しかできないことを

高校時代にサッカーが好きで、プロサッカー選手の栄養管理をしたいと思ったことをきっかけに、管理栄養士の資格が取得できる大学へ進んだ植田さん。卒業後は、病院で管理栄養士として勤務していた。もともと語学にも興味があり、また、自分の持っている資格を生かしたいと思っていた。テレビ番組で、開発途上国で活躍する栄養士の姿を見た時に「この人のようになりたい、開発途上国の現状を何とかしたい。今しかできないことをしよう」と思い、JICAへの応募を決意した。

JICAで用意された70日間の研修プログラムでは、語学はもちろん、ボランティアの知識や技術、異文化などについて学び、日本で当たり前のことが海外では当たり前ではないことを学んだ。

植田さんが訪問するケニアでは、小さな子どもがおなかをすかせて死んでいく。これはお母さんに栄養管理に関する知識がないことや、自分の子どもが病気であるとに気づかないことなどによるものだ。「そんな状況を見過ごせない」と植田さんは話した。

互いの成長が「支援」

「現地で自分に何ができるかわからないが、精いっぱいのことをやってきたい。ただ、労力や金銭を与えるのではなく、互いが成長できるように支援してきたい。私が持っている知識や技術を支援することで、現地の人には成長してもらい、私は現地の文化や語学を学んで成長させてもらう」と笑顔で話す。彼女の支援が開発途上国の成長につながることに期待したい。